

I. 建学の精神・大学の基本理念、使命・目的、大学の個性・特色等

1. 南九州大学の建学精神

本学の建学の精神・大学の基本理念は、創立以来歴代の理事長・学長により何種類も作成されてきている。「建学の理想」(昭和 42(1967)年)、「本学教育の理念」(昭和 43,44(1968,69)年)、「建学の精神」(昭和 45(1970)年)、「建学の魂」(昭和 46(1971)年)、「教育の理念」(昭和 47～53(1972～78)年)、「教育の理念」及び「建学の指標」(昭和 54～63(1979～88)年)、「建学の指標」及び「わが道」(平成 2～5(1990～93)年)、「わが道」及び無題「告示」(平成 6～8(1994～96)年)といった工合である。

ちなみに開学時(昭和 42(1967)年)は「建学の理想」として次のように掲げられている。

本学は君たちを型にはまった学園で学ばせようとするものではなく、型にはまった人間に育てようとするものでもない。以下述べる本学の建学の理想を理解してほしい。

1. 大学は学問の府である。大学に学ぶ君たちは、君たちをとりまくすべてのものにあくことなき探求の目を向けなければならない。
2. 現代社会は君たちを必要としている。君たちの若々しい創造力への期待の大きさを思うとき、継承すべきものは継承し、その土台の上に君たちの創造力の花を咲かせるようつとめなければならない。
3. 人間的幅と広い視野をもつことを本学は君たちに要望する。すべてのその専門の道において絶対に他の追従をゆるさないのは当然であって、人間としての評価はエキスパートであることだけにとどまってはならない。
4. 社会人として生きていくうえには、偉大な勇気を必要とする。その勇気は文字の上の勇気にとどまるべきではなく、人間が真の勇気をふるうことのむつかしさを君たちは知っておかなければならない。

青年の特質は、ものごとを素直に感激することである。感激する心こそ若者のすべてである。君たちのこの感激が、明るい学園を創造するであろう。

また、平成 2(1990)年からは以下のような内容であった。

1. 人格こそ人間のさまざまな資質や能力を統一する価値である。志を立てるは、正に事の始めである。
2. 個性に生きることは、自己を全うする本然の道である。すべての人は等しく、それぞれに生きる能力と使命をもって生を授かる。ただ人間という石は、磨かざる限りその光を発しない。
3. 実学は人間に裨益する真理でなければならない。それは他に学び、自分に問う事の蓄積によってのみ成る。

平成 3 (1991) 年の大学設置基準大綱化以降、本学も教育課程再編成に取り組み段階的に教育改善を実施してきたが、大学の基本理念を組織的に再検討するのは、平成 8 (1996) 年の自己点検からである。それまで、人格教育・人間形成といった精神面の教育を標榜する理念であった。本学は開学以来の教育方針として、実学教育を通して社会貢献できる人材育成を目指しており、この理念を具現化し学内外に明示するため次のような教育研究の理念を策定した。

豊かな自然と温和な気候に恵まれた、南九州の環境のなかで、創造性に富み、人間性と社会性豊かな人間を育成するとともに、園芸生産、食品工学、農業経済、緑豊かな環境保全等に関する基礎的、応用的研究をすすめ、専門分野において社会に貢献寄与できる人材を育成する。【平成 8 (1996) 年度】

教育研究の理念は、骨子の変更はないものの、平成 14 (2002) 年の環境造園学部改組に伴い、それまで学科ごとの研究分野を具体的に表現していた「園芸生産、食品工学、農業経済、緑豊かな環境保全等」を「食・緑・環境」と包括的な表現に改訂し、現在に至っている。

豊かな自然と温和な気候に恵まれた南九州の環境のなかで、創造性に富み、人間性と社会性豊かな人間を育成するとともに、食・緑・環境に関する基礎的、応用的研究をすすめ、専門分野において社会に貢献寄与できる人材を育成する。
【平成 14 (2002) 年度】

2. 南九州大学が目指す大学像

【創造性・人間性・社会性豊かな人間育成】

本学が位置する宮崎県は、豊かな自然と人情味溢れる土地柄で、豊かな人間性を培うのに適した風土である。この恵まれた環境の中で地域社会と連携し、実学教育を通し創造性、人間性、社会性豊かな人間を育成することが本学の目指す大学像であり、使命である。

現在、この使命に基づき、育成された約 8,000 人の卒業生が社会のさまざまな分野で活躍し、社会に貢献している。

【社会に貢献できる実学教育】

本学が掲げる教育研究の理念「食・緑・環境」は、現代社会で人間が直面している重要な問題を包含するキーワードである。食と緑の領域は食環境、緑環境のように環境問題と不可分であり、それぞれの領域が現代社会で深刻化している環境破壊、環境汚染などの問題解決方法を提案、実行できる学問として有機的に結びついている。本学では領域ごとに次のような学問分野を取り扱っている。

（食の領域）

- ・ 蔬菜、果樹などの園芸作物の育種、栽培、保護を中心に、生命の源である食料の生産・加工。
- ・ 医食同源の考え方から食と健康の問題を探究し、医療行為を含めた正しい食生活のサポート。
- ・ 食品に関する幅広い知識を修得し、安心できる食生活を送れるような食品の分析・管理、安全な食品の開発。
- ・ 地産地消の見地から郷土の食材活用法、開発、普及の探求。

（緑の領域）

- ・ 花卉の栽培、育成技術の習得。
- ・ 伝統的な日本庭園、個人庭園や公園などの生活環境を取り巻く緑地空間の創造。
- ・ 自然空間を中心に、人と地域と環境の調和を図る快適な生活空間の創造。

（環境の領域）

- ・ 生産性と環境保護を両立できる作物栽培方法の探求。
- ・ 多様な生物が生息する地域の自然環境と、人間が居住する地域環境の両立性を探究し、文理融合教育による環境問題の総合的な解明。
- ・ 失われた自然の再生修復。
- ・ 自然との共生が可能な社会の構築。

以上の領域を実践するため、本学では多彩なカリキュラムが用意されている。取り分け実験・実習・演習を重視した実学教育を実施している。実学教育で培われる創造性、人間性、社会性豊かな人間形成を踏まえて、今後も社会に貢献できる人材を育成することを目指していく。

【高度専門職業人の養成】

園芸学・食品学研究科は、学部を基礎とする大学院修士課程で、園芸学専攻と食品学専攻で構成されている。大学院では学部教育での専門知識に基づき、高度な園芸技術の修得、緑地環境保全技術の修得、商業的農業の分析力の修得及び安全な食品開発のためのバイオテクノロジーの修得をはかり、社会の要望する高度専門職業人の育成を目指している。

大学院は開設当初の 6 分野から、平成 18（2006）年度に造園学を加えて 7 分野とし、以下のような教育研究を実践し、高度専門職業人を養成している。

(園芸生産科学分野)

花卉、蔬菜の栽培技術、生理生態、生産物の品質等について、室内研究とフィールド研究とのバランスを重視した基礎的・応用的教育研究。

(園芸資源科学分野)

バイオテクノロジーによる花卉、野菜、果樹などの優良苗の増殖と育種に関する研究教育および園芸植物の病理に関する基礎的・応用的な研究教育。

(環境保全分野)

地球生態系についての理解と認識を深め、人間が自然と調和を保ちながら生きていくための方策を模索する。無機的自然(岩石風化学)や植物的自然(環境植物学)、有機的自然(緑地保全学)、生産的自然(資源植物生産学)など地球生態系の構成に関わる4因子の性質を学び、同時にそれら进行分析するための理論と実際的な技術を習得する。

(農業経済学分野)

歴史分析としての地域農業史をはじめ、現状分析として生産から流通、消費までを農業生産組織論、農産物マーケティング論、生活経済論でカバーし、政策分析として森林政策学を配置している。本分野では、講義・演習・実態調査を中心とした研究教育を通じて、地域農業に関する専門的な分析力の修得を可能にする。

(造園学分野)

身近な住空間から健康や福祉まで配慮した公園の計画設計学、開発に伴う自然破壊を修復する理論と技術を追求する緑化学および応用生態学、緑地計画史と地域特性を軸にした景観学という3つのテーマを柱にした研究教育。

(食品微生物分野)

微生物の多様な働きと関与という観点から、食品をめぐる諸問題を捉えて、環境にも配慮した教育と研究を行う。特に、微生物分類、微生物利用、酵素利用の3つの科目に重点を置き、微生物の機能、構造、それに酵素などの有用生産物の生産や解析に関する基礎的・応用的な研究を遺伝子工学や細胞工学の手法をベースにした研究教育。

(食品化学分野)

近年、さまざまな食品成分が人の体の調整機能に関わっていることが解明され、がんや生活習慣病の予防、老化の防止にも期待されている。本分野ではこうした生体調節機能を持つ食品成分の構造と機能性について教育・研究指導を行い、食品・栄養化学に精通した専門家を育成する。

(食品生化学分野)

植物における食用色素の代謝や代謝調節機構、細胞内での活性酸素に対する細胞防御の機構、および食品アレルギーの原因タンパク質の性質解明などについて、植物学、植

物生化学、植物生理学、分子生物学、細胞生物学を基礎として、遺伝子工学やタンパク質工学の最新手法を取り入れた教育研究を行う。特に遺伝子やタンパク質の研究法を専攻実験を通じて重点的に指導する。